

「アメリカに守ってもらう前提の安全保障政策は非常に危険では？」

平成 28 年 4 月 26 日

●ワカズミさんからの質問

西田先生、週刊西田毎週楽しみに見ております。アメリカ大統領選でトランプ候補が日本の核武装を容認したとして話題になりました。私は核武装には反対ですが、アメリカに頼らず自国の戦力で自国を防衛するということは主権国家として当然のことと思います。以前も集団的自衛権について同じような質問をさせて頂きましたが、やはりアメリカの国力低下が囁かれる昨今、アメリカに守ってもらう前提の安全保障政策は非常に危険ではないかと心配しています。これを転回しない限り沖縄の基地問題の解決はいつまでもされず、経済政策でもアメリカに言われるがままとなってしまうのではないのでしょうか。すぐに根本からの転換をすることは難しいと思いますが、5年、10年を掛けて漸進的に変えていくべきではないのでしょうか。西田先生のご意見をお伺いしたいです。よろしくお願いします。

●西田昌司の答え

「自分の身は自分で守る」「自分の家族は自分で守る」といった独立自尊の精神を否定してしまえば、人は生きる意味すらなくなってしまうと思うのです。同じように、「自分の国は自分で守る」といった精神をなくしてしまったら国家の存在意義もなくなってしまうますが、戦後の日本は残念ながらそのような精神をなくしてしまいました。

日本は元々はそのような国ではありませんでした。160年前の黒船来航以来、日本は欧米列強からの侵略の危機に晒されましたが、我々の先人は殖産興業に励んで軍事力を備えることで植民地化を免れましたし、日本はアジア

の中で独立を守った唯一の国と言っても過言ではないと思います。力を付けた日本は（欧米列強と同じく）外に出て権益を求めましたが、一方でアメリカも建国以来西へ西へと権益を求めましたし、中国大陸における日本とアメリカの権益争いが結局先の大戦につながってしまいました。

今さらアメリカと一戦を交えようなどと思う方はほとんどいないでしょうが、大東亜戦争で日本がアメリカに負けて、占領中にアメリカの駐留軍に居座られ、占領が終わった時点で本来は駐留軍は撤退すべきであるのに今に至るも駐留し続けているのは非常な屈辱であると言わざるを得ません。もちろん、独立した頃の日本は経済力もありませんでしたし、東西冷戦時代に軍事力のなかった日本が共産勢力に取り込まれなかったのはアメリカの軍事力があつたからだと言わざるを得ません。冷戦時代、在日米軍基地はアメリカにとっての反共の砦でしたが、日本が単独でソ連に対抗できるはずもなかった時代ですし、アメリカに守ってもらいながら経済成長するという道を日本は選ばざるを得なかったのでしょうか。

しかし、どうの昔に冷戦は終わりましたし、現在の脅威的な大国と言えばソ連ではなく中国という時代です。また、北朝鮮が核実験を繰り返して水爆実験にも成功したと言われ、核を飛ばすミサイルを持つという非常に恐ろしい状況となっています。同盟国のアメリカとの集団的自衛権の行使も含めた国際的な軍事的協力関係が非常に大事ですが、一方で「自分の国は自分で守る」という議論が絶対に必要です。

冷戦の真ただ中にソ連の崩壊を予測できた人は少なかったですし、先日の熊本地震や東日本大震災のようにいつ何時、何が起こるかわからない世界に我々は生きています。万一に備えて（普段は無駄とも思われる）様々な備えをしておかなければなりません。地震をはじめとした自然災害の備えとして、インフラ整備による国土強靱化の必要性は多くの国民が気付き始めています。同様に、隣国の軍事的脅威に対する備えとして、軍事力の強化や（軍事力を有効に機能させるための）法整備が必要です。戦後70年の間、日本は幸いにして戦争に巻き込まれることはありませんでしたが、そういった平

和な状態を維持するためにも軍事力の一つとして核武装の議論もすべきだと思います。

私は核武装をすべきと言っているのではなく核武装の議論をすべきと言っているのです。議論の結果、「今は核武装すべきでない」「核武装するための核実験の場所が日本にはないから無理だ」「アメリカの核の傘に頼った方が安上がりだ」といった核武装に否定的な意見もいろいろと出てくるでしょうが、多いに議論をすればよいのです。核という言葉の前で思考停止をしてしまって何も考えないという姿勢は実は国民の命を蔑ろにしていると言えますし、特に我々政治家はそのような思考停止が許されるはずもありません。トランプ候補の発言を奇貨として「自分の国は自分で守る」という当たり前の方向に日本が向かうことを期待します。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>